

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：47407

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K21802

研究課題名（和文）萌芽的な仮名や漢字の習得に影響を与える要因の特定

研究課題名（英文）Investigation of factors affecting the acquisition of embryonic kana and kanji

研究代表者

安村 由希子（Yasumura, Yukiko）

尚絅大学短期大学部・幼児教育学科・准教授

研究者番号：60528363

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,600,000円

研究成果の概要（和文）：(1)仮名71文字の習得に関連する要因を探ることを目的とした。そのために定型発達児を対象に、仮名71文字の読みの習得状況、及び音韻意識を始めとした諸能力を測る課題を実施し、関連性を探った。また、特異的読字障害と定型発達児を比較し、仮名習得を阻害する要因について検討を行った。(2)特異的読字障害児を対象に、仮名やカタカナの特殊音節、漢字の送り仮名の表記に影響を与える要因を探った。その結果、仮名71文字の習得には音韻意識他、聴覚弁別能力が必要なこと、およびこれらの能力に問題があると、仮名やカタカナの特殊音節の習得に問題があることが示された。一方、漢字の送り仮名の表記には問題が見られなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言葉を音として理解する「音韻意識（phonological awareness）」は読み書きの背景要因となると言われてきたが、本研究によって聴覚弁別の力も仮名やカタカナの習得に影響することが示された。このことは、評価方法や指導方法を検討する上で、プラスになると考えられ、読み書きや音韻意識の指導の前に、聞き分けの力を測定し、それを改善することで、読み書きの向上につながることを示唆された。

研究成果の概要（英文）：(1) The purpose was to explore the factors related to the acquisition of 71 kana characters. For this purpose, we conducted a task to measure various abilities such as the reading acquisition status of 71 kana characters and phonological awareness in typically developing children, and explored the relationship. In addition, we compared a child with specific reading disabilities (dyslexia) and a typically developing child, and examined the factors that hinder the acquisition of kana. (2) We explored the factors that affect the writing of special syllables of kana and katakana, and kanji okurigana for a child with specific reading disabilities. As a result, it was shown that mastering 71 kana characters requires phonological awareness and auditory discrimination ability, and that problems with these abilities lead to problems with learning special syllables of kana and katakana. On the other hand, it was found that there was no problem with the notation of okurigana in kanji.

研究分野：特別支援教育

キーワード：仮名71文字 漢字の送り仮名の表記 仮名やカタカナの特殊音節 音韻意識 聴覚弁別

1. 研究開始当初の背景：音韻意識（phonological awareness）はこれまで仮名の読み書きの基礎となると言われてきた（大石と斎藤、1999）。音韻意識とは言葉の音に着目する力を指し、例えば「りんご」が3つの音から成ると理解する力をいう。しかし、仮名71文字は文字と音との対応関係が単純のため（加藤ら、2019）読みの習得に音韻意識の力をさほど必要としないと考えた【仮説1】。一方、仮名やカタカナの特殊音節の読みの習得は、文字と音の対応が不規則になり、明確な音韻意識が必要と考えた【仮説2】。また、漢字の送り仮名の表記にも、明確な音韻意識が必要と考えた【仮説3】。

2. 研究の目的：(1)仮名71文字の読み書きに関連する要因を探ることを目的とする。そのために定型発達児を対象に、仮名71文字の読みの習得状況、及び音韻意識を始めとした諸能力を測る課題（視覚弁別等）を実施し、関連性を探る【研究1】。また、特異的読字障害児（dyslexia）と定型発達児を比較し、仮名習得を阻害する要因について検討を行う【研究2】。(2)仮名やカタカナの特殊音節の読み書きに影響を与える要因を探ることを目的とする。そのために、特異的読字障害児の仮名やカタカナの特殊音節の習得状況とそれに影響を及ぼす諸要因の調査を行う【研究3】。(3)漢字の送り仮名の表記に影響を与える要因を探ることを目的とする。そのために、特異的読字障害児の漢字送り仮名の習得状況と、それに影響を及ぼす諸要因の調査を行う【研究4】。

3. 研究の方法：【研究1】対象は年中児4名（男児3名、女児1名）。全例K-ABC「模様の構成」の評価点が9以上であり、知的な遅れは無いと考えられた。課題は仮名71文字の読み、視覚弁別、聴覚弁別、音韻意識の課題として逆唱、削除（加藤ら、2019の課題を一部含む）、モーラ数かぞえ（大石と斎藤、1999）を用いた。その他、音韻復唱（佐藤、兼築2007）、言語課題（PVT、ITPA言葉の類推）も実施した。【研究2】対象は特異的読字障害が疑われる1名（8歳、男児）と定型発達児1名。診断は受けてないものの、生育歴では仮名71文字の習得スピードが遅く、8歳段階でも仮名の読み書きに問題を示し、稲垣らの課題（2021）で特異的読字障害の可能性が高いと考えられた。また視線計測装置（Tobii）を用いて読みの様子を計測したところ、北條ら（2016）で報告されている特異的読字障害群と同様の傾向を示した。この事例の5歳段階のデータと、定型発達児（5歳）を比較する。なお両名ともWISCやWPPSIで測定されるFSIQは100以上であり、知的遅れは見られなかった。課題は仮名71文字の読み、視覚弁別、聴覚弁別、音韻意識（逆唱、同定、モーラ数かぞえ）である。【研究3】対象児は研究2の特異的読字障害児1名である。課題は単語や非語の逆唱や削除（加藤ら、2019）、モーラ数かぞえ、特殊音節を含んだ仮名やカタカナの聴写（各10問）を行った。比較として、年長児3名（全例、仮名71文字が既に読め、模様の構成で評価点が9以上の者）のデータを用いた。【研究4】対象児は研究3と同様である。追加の課題として、漢字の送り仮名の聴写（10問）を行った。なお、用いた漢字課題は対象児の学年より一つ下の学年までに習うものであり、対象児が既に学校で教わっている漢字である。

4. 研究成果：【研究1】読みが進んでいる2名と、そうでない2名に分かれた。なお、家庭での仮名学習状況や兄弟の有りに無しに違いはなかった。結果、先行研究と異なり（丹治ら、2020）文字の読みの習得状況と音韻意識との関連性は見えず（表1）、仮説1を支持する形となった。ただ、対象の人数も少なく、また読める・読めないという括りが暫定的であり、この時期の「読めない」という状態は障害ではなく、個人差という捉え方が妥当と考えられた。そのため、障害としての躓きが見られる幼児との比較が求められた。

表1：年中児4名の結果（括弧内は正答率を示す）

	読める文字数が多い		読める文字数が少ない	
	A児	B児	C児	D児
読めた仮名文字数	71文字(100%)	69文字 (97.2%)	12文字(17%)	36文字 (50.7%)
視覚弁別	15/15 (100%)	14/15 (93.3%)	14/15 (93.3%)	14/15 (93.3%)
聴覚弁別	14/15 (93.3%)	12/15 (80%)	14/15 (93.3%)	7/15 (46.7%)
逆唱	5/12(41.7%)	4/12(33.3%)	3/12(25%)	0/12(0%)
削除	3/12(25%)	6/12(50%)	8/12(66.7%)	0/12(0%)
モーラ数かぞえ	11/15(73.3%)	9/15(60%)	7/15(46.7%)	8/15(53.3%)
音韻復唱	10/14(71.4%)	7/14(50%)	11/14(78.6%)	5/14(35.7%)
模様の構成	10	11	10	9

PVT	11	4	13	12
ITPA「言葉の類推」	35	19	34	25

【研究2】3つの音韻意識の課題において特異的読字障害児は定型発達児と比較して劣っていた(表2)。加えて、聴覚弁別の課題においても特異的読字障害児の方が成績が悪かった。先行研究において、特異的読字障害児の聴覚弁別能力については諸説(井上、2014)があるが、音韻の粒が英語より大きいとされる仮名71文字の習得に躓くといった、いわば中度～重度の音韻の問題を抱えると想定されるケースにおいては、聴覚弁別といった低次の処理能力にも問題があり、それが音韻表象の形成を阻害している可能性が示された。また、このことは特異的読字障害児の特徴である「言葉の聞き誤りが多い」といったこと(加藤ら、2019)、対象児の「似た音の文字を書き誤る」といった特性と関連すると考えられた。以上、研究2より、音韻意識に加え、聴覚弁別能力が71文字の読みの習得に関連する可能性が示された。

表2：定型発達児と特異的読字障害児の比較

	定型発達児	特異的読字障害児
調査時期	5歳9か月時	5歳9か月時
読めた文字数	71文字(100%)	9文字(12.7%)
視覚弁別	34/34(100%)	33/34(97.1%)
聴覚弁別	24/30(80%)	19/30(63.3%)
逆唱	11/15(73.3%)	5/15(33.3%)
同定	14/15(93.3%)	6/15(40%)
モーラ数かぞえ	19/24(79.1%)	7/24(29.1%)

【研究3】特異的読字障害1名の仮名聴写の得点は10問中8問の正答、カタカナ聴写の成績は10問中5問の正答であった。平仮名やカタカナは小学1年生段階で学ぶものであるが、8歳になっても困難を抱えることが分かった。エラーを分析すると、拗促音(例:「ひゃっぴき」を「ひゃびき」と書く)の誤りが多く、特殊音節が重なると間違いが増える可能性が示された。逆唱、削除の4課題では、正答数は標準域だが、反応時間は標準域を超えた(表3)。また、モーラ数かぞえにおいては、3名の年長児の平均正答率(86.7%)より下回った。仮名やカタカナの特殊音節に躓く理由として、こうした音韻意識の悪さが影響することが示され、仮説2を支持した。

表3：特異的読字障害児1名の音韻意識の課題結果

	正答数(平均)	反応時間(平均)
単語逆唱	3	9
非語逆唱	2	22
単語削除	4	8.75
非語削除	4	18.75
モーラ数かぞえ	10/15(正答率約66.7%)	—

【研究4】漢字の聴写については、10問中3問のみの正答であった。課題は「早い」「正しい」などのように、漢字だけでなく送り仮名も書く課題であったが、送り仮名のエラーは誤り7問のうち1問だけであり、ほとんどは漢字そのものが書けないという平仮名71文字の習得に躓く状態と類似したものと考えられた。これは仮説3とは異なる結果となった。この理由として、漢字の送り仮名の表記は、例えば「早い」なら「はや」と「い」のように、「はや」で一塊となり、仮名やカタカナの特殊音節に比べて音韻の粒の単位が大きくなるため、音韻意識に問題のある特異的読字障害児であっても、さほど躓きを示さないと考えられた。ただし、漢字の書き取りについては、視覚的能力や構成能力も必要とされるため、今後さらに検討することが必要と言える。

参考、引用文献

- ・大石敬子、斎藤佐和子、言語発達障害における音韻の問題 読み書き障害の場合、音声言語医学、40巻、1999、378-387
- ・加藤醇子、安藤壽子、原恵子、縄手雅彦、Easy Literacy Check、図書文化、2019
- ・佐藤久美子、兼築清恵、無意味語反復から分かる、子どもの語彙能力：英語と日本語の比較、論叢「玉川大学文学紀要」、48号、2007
- ・稲垣真澄、特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン、診断と治療社、2021
- ・北條彰、田角勝、阿部祥英、花岡健太郎、小林梢、板橋家頭夫、特異的読字障害児の音読における視線の特徴、昭和学会誌、76巻、5号、2016、598-606
- ・丹治敬之、井上知洋、茂木成友、高橋彩、年少から年長幼児におけるかな読みと音韻意識の関連、LD研究、29巻、4号、2020、245-257
- ・井上知洋、聴知覚および音韻知覚と読み困難、特殊教育学研究、51巻、5号、2014、441-450

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安村由希子	4. 巻 18
2. 論文標題 学習障害について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 児やらい	6. 最初と最後の頁 119-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------